

## 楽庵ニュース 第4号

2010年 10月 10日

発行元:NPO 法人茅ヶ崎ユニバーサルデザインスクエア

地域活動支援センター 楽庵

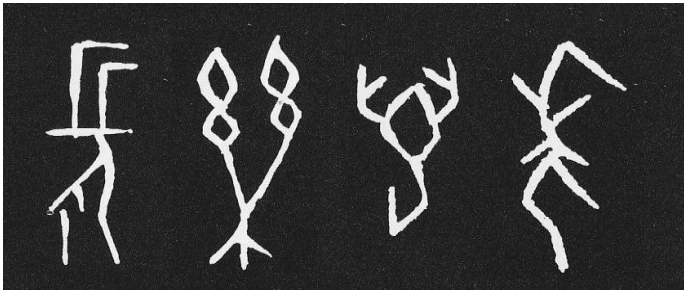
茅ヶ崎市浜竹3-4-64石黒ビル2F

TEL&FAX 0467-86-5898

ホームページ <http://park11.wakwak.com/~rakuan>

メールアドレス [rakuan@aq.wakwak.com](mailto:rakuan@aq.wakwak.com)

\*長楽萬年(古代文字):楽しいことの幾久しく限らないこと。



## 私たちの

# ユニバーサルデザイン

平成十九年、障害者自立法に基づいて、障害者地域作業所楽庵から地域活動支援センター楽庵に移行するためにNPO法人格を取得し、その法人の名称を「茅ヶ崎ユニバーサルデザインスクエア(広場)」としました。

ユニバーサルデザインとは、米国ノースカロライナ州立大学のロナルド・メイヌ教授が一九八五年に公式に提唱した概念で、「年齢や障がいの有無にかかわらず、できるだけ多くの人が利用可能であるようにデザインする」ということです。この概念は、次の七つの原則があります。

- 一、誰にでも公平に利用できること(公平性)
- 二、使うことで自由度が高いこと(自由度)
- 三、使い方が簡単で、すぐ分かること(単純性)
- 四、必要な情報がすぐに分かること(わかり易さ)
- 五、うっかりミスが危険につながらないこと(安全性)
- 六、少ない力で効率的に、楽に使用できること(省体力)
- 七、使い易いスペースと大きさを確保すること(スペースの確保)

この概念こそが地域活動支援センター楽庵が目標とすべき姿であると確信し、「NPO法人茅ヶ崎ユニバーサルデザインスクエア」と

命名しました。

ユニバーサルデザインによる地域活動支援センターが目指すのは、さまざまな個性を持つ一人一人が大切にされ、個性の多様性を認め合うことのできる、人づくり・地域づくりです。いくつになってもこの住み慣れた地域で暮らしたい、たとえ体が不自由でも自立して暮らしたい、点から線へ、線から面へ、人から人へ、連帯と協働の輪の広がりが楽庵・地域のユニバーサルデザインを現実のものとする

します。折りしも今、政府で総合福祉法(仮称)の議論が行われています。この施策がユニバーサルデザインに配慮したものであることを切に望みます。

## 湘南 四季の花

今年は猛暑が続き、9月に入っても真夏日。小出川のヒガンバナの開花も遅くなり、彼岸明けでようやく満開だ

(茅ヶ崎市芹沢小出川)





# 妖怪にあいたい 有佑 作品



心臓を手術した頃から有佑は喪黒福造になることがある。寓話「笑うセールスマン」の福造は「こころのスキマ埋めます」という名刺を渡して現代人のちよつとした願望をかなえるセールスマン。

有佑の心臓に穴があいていたことと関係ないが、喪黒福造になりきる有佑も黒い帽子を被っている。「笑うセールスマン」では、客が約束を破ったり、聞き入れない場合は、その結末で代償を負わせる。喪黒福造は「うまい話には注意せよ」と警鐘する。ふてぶてしい態度で人間のいい加減さや弱さやおろかさを高笑いする。有佑の笑顔はさわやかだ。

有佑は「妖怪に会いたい」と望んでいる。真剣に「猫バス」や「ねずみ男」や「目玉おやじ」を陶器で作り、水木上げると会いたいと言う。

NHK朝のドラマ「ゲゲゲの女房」が放映されて、いつか写真を送りたいと思っている。喪黒福造がもしかしたら援けてくれるかもしれない。有佑の想像力は陶芸でもいかに発揮されている。



## 2010年夏の活動

水を得た魚のように、今年の夏は、NPO法人ゆい主催の茅ヶ崎ゴルフ倶楽部からの花火見学会や、浜竹3丁目自治会の納涼祭に参加し、感動の日々でした。花火観賞会には、メンバーとその家族、支援者や地域の仲間も加わり、大輪の光の芸術に見とれました。一瞬の光に皆息をひそめ、散りゆく一瞬のまばたきのような光に日ごろの思いを託しました。苦しみも喜び

## 講演会開催 「物理的配慮とは？」

講演会を8月7日に開催しました。講師にはNPO法人東京都閉症協会理事長で社団法人日本発達障害社会福祉連盟理事を務める今井忠さんと、弘済学園の宮田明さんをお迎えしました。

当日は「発達障害の理解と対応」という演題で、特に就労に関しての事例を通して講演して頂きました。これまでの日本の労働や福利厚生制度は個別の事情を合理的に汲む制度はできていなかった。従業員対会社というマスの論理とは異なる個の問題である。実際に事業化した働き場所での関わりを通して個別的具体的手立てのもとに、どのような組織のあり方が望まれるかを話して頂きました。

これまでの社会のあり方でも多様性こそ発展の原動力になっている事実から障がいのあるなしに関わらず合理的配慮を個人の特性に応じて進めることが大切であることを教えて頂きました。これは単に信条の問題でなく、発達障がいの就労に①物理的環境、②人的環境、③役割を具体的かつ明確に本人に伝えるなどを整備していくことが労働環境になることを示唆されました。

組織の人間である前に個人として向き合う大切さは、茅ヶ崎在住の作家故城山三郎の詩「旗」に表現されています。

旗振るな 旗振らすな 旗ふせよ 旗たため  
社旗も校旗も国々の旗も 国策なる旗も  
運動という名の旗も ひとみなひとり  
ひとりにはひとつの命 走る雲 冴える月  
こぼれる星 奏でる虫 みなひとりひとつの輝き  
花の白さ 杉の青さ 腹の黒さ 愛の軽さ

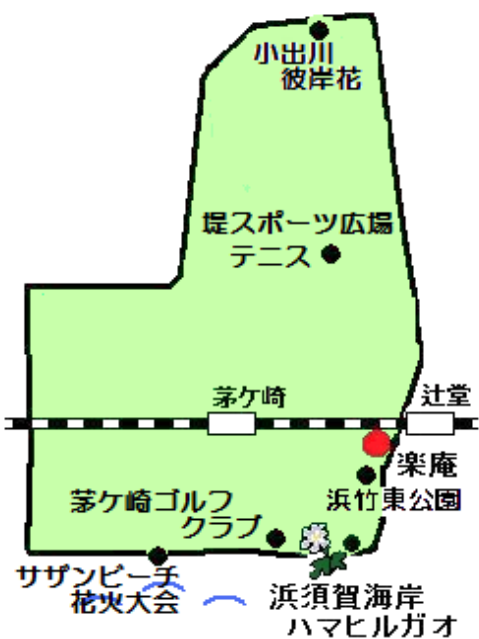


も暑さもふっ飛び、浄化されるような感覚でした。参加者は明日に大きな期待を持ち振り返らずに一步を踏みしめて生きようと感じたようです。来年も参加したいという希望が多く寄せられました。ついで浜竹3丁目自治会納涼祭では、ご近所の子供



相互に人格と個性を尊重し支え合う共生社会を実現できるように願いました。これからも地域に根ざした活動を進めていけるように気持ちを新たにしました。猛暑でしたが、地域での暮らしを満喫しました！

もおとなも家族総出で屋台、ヨーヨー釣り、金魚すくい、盆踊りを楽しみました。楽庵もメンバーと一緒に懸命作った陶芸等の作品を売る模擬店を出店しました。祭りでは、市民として



来年度の当学会の研究大会は鳥取で開催されます。



みなひとりひとつの光 狂い 狂え 狂わん  
 狂わず みなひとりひとつの世界  
 さまざまに果てなき世界 山ねぼけ 湖しらけ  
 森かげり 人は老ゆ  
 生きるには 旗要らず 旗振るな 旗振らすな  
 旗伏せよ 旗たため 限りある命のために  
 ひとりひとりの特性や文化を大切にすることのあり方は社会にとっても基本です。今井さんの言われる合理的配慮とは、これからの社会をよりよくするためのヒントであると参加者は感じました。  
 弘済学園の宮田明さんも社会モデルに関しての貴重な話をしてくださいました。  
 お二人は9月4、5日、東海大学で開催された日本発達障害学会神奈川大会でもリーダーシップを発揮されました。

この人  
理事 木村俊彦さん

東京都の公立学校や教育相談

所の勤務を定年で終え、最後は地元で何か今までの経験を活かした地域福祉のお手伝いをおもっていたところ自治会から話があつて民生・児童委員を引き受けた。短い期間の心算だったのに、いつの間にか、あれからもう十五年を経過しようとしている。

楽庵さんとのつながりも松浪地区の民生委員や社会福祉協議会の役員をやらせて頂いていた関係で平成十五年から地域の障害者作業所楽庵を経て現在のNPO法人茅ヶ崎ユニバーサルデザインスクエアに至るまで、もう六年のお付き合いになる。



いま私が注目しているのは楽庵の地域活動支援センターとしての役割で、作業所としての日常的な業務の傍らさまざまな活動を通して地域の方々とのふれあいを大切にしながら障害をお持ちの方への理解を深め、ご相談にも対応できる体制を整えてきていることである。

これらの地道な活動が地元の自治会や地区社会福祉協議会の活動と連携しながら地域の中で根を下ろし、地域の福祉のネットワークの一つとして機能し、この地域にお住まいの障害者も高齢者も子供たちもみんな普通に当たり前に、共に暮らせる地域になっていくことに期待している。

最近、年齢と共に体力の衰えを感じはじめているのだが、これ以上の低下をくい止めるために週に二回ほど

市営のコートで同じような年齢の仲間たちのサークルに入れてもらってテニスを楽しんでいる。さすがに若い頃のように左右前後の動きに俊敏に反応することは無理になってきたが、それでも体力の維持とストレスの解消やコミュニケーション不足を補うには役に立っていると思っている。さらに体が思うように動かなくなっても出不精にならないように、散歩も兼ねて月に3回は定期的に横浜や東

京に出かけて昔からの碁の仲間たちと碁盤を囲む機会を持ち、番外の付き合いや右脳の活性化にも努めている。



編集後記

光合成する植物は山火事が来ようと地震が来ようと逃げ出しもせずに平然としている代わりに宇宙とハーモニーに全霊を尽くしていると三木成夫は著書「内臓のはたらきとこころ」に書いている。茅ヶ崎海岸に生えている砂草も温暖化のせいかすっかり見なくなった。NPO「ゆい」は砂草（ハマヒルガオ ハマボウフウなど）を育て、自然再生という取組をしている。来春里親を募集するとか。花火大会でお世話になったNPO「ゆい」のテーマに賛同し、企画する予定。詳細は次号に掲載します。